

6 旧酒米品種復活の取り組み

酒米試験地では、育種のための素材として、全国の酒米品種を集めている。古い品種も数十ほどあり、日本酒党なら、なつかしい名前を見て、どんなお酒になるのか素朴な疑問がわいてくる。そういう方々の要望にはできる限り協力してきた。

一握りの種子から酒造りまでには、少なくとも2～3年の年月と多くの人々の連携を要し、特に、目を付けた品種でいい酒ができるかどうかは酒造メーカーにとっては危険な冒険でもある。協力が無駄にならないか、そんな心配をよそに、あちこちでそれぞれ品種の特徴のあるいいお酒ができ、地域興しにも一役かっているようである。昔のお米の不思議な力を感じている。

県下で最も早く復活した品種は吉川町の「新山田穂1号」で、続いて「神力」、「但馬強力」、「山田穂」、「渡船」（篠山市）、「早大関」（加西市等）である。そのうちの地域ぐるみ協力型3品種について、現地からの報告を紹介する。

世古 晴美（中央農技・酒米試験地）

「神力」甦る

「神力」は、明治から大正時代にかけて全国の水稲作付け面積の約2割を占めていた。戦後の難の時代の多収米として全国的に普及しただけでなく、「五百万石」や「コンヒカリ」等の交配母体となって現在にもその血は引き継がれている。

「神力」は、1877（明治10）年に揖保郡御津町中島の丸尾重次郎氏が、「程良」の中から3本の穂を発見し、改良を重ね育成された。

復活の発端は熊本県であるが、1994年に姫路市網干区にある本田商店社長が「郷土が生んだ米の原種で酒を造りたい」と要望された。酒米試験地が京大農学部から保存種子を取り寄せ、1996年に100年ぶりに地元の中島集落で栽培された。

その後、御津北営農組合と普及センター、農協の協力のもと、国の生物資源研究所から取り寄せたものも加えて8系統の比較試験を行い、酒造適性に優れた1系統を選出して現在約3ha作付けている。

谷尻 勇人（竜野普及センター）

西脇多可での「山田穂」復活

「山田穂」の母親である「山田穂」は、1877（明治10）年頃多可郡安田郷（中町）の山田勢三郎氏によって生み出されたと伝えられている。

JA北はりま（現JAみのり）では1997年に、酒米試験地が京大及び九大から取り寄せて採種した種子を譲り受け、16aで試作した。

「山田穂」は「山田錦」に比べ、長稈で出穂登熟はやや早い。長稈のため倒伏を心配したが、最高分げつ期の莖数を株当たり15～17本に抑えれば倒伏せずに相当の収量をあげることが実証できた。収穫した米で酒造会社に醸造試験を依頼し、高い評価も得た。そこで翌年から、「山田穂」発祥の地で「山田錦の母」の復活に向け本格的な増反に取り組んだ。栽培面積は1998年366a、'99年587a、出荷量は13,800kg、24,150kgと順調に伸びている。

製品は1998年から本田商店が「龍力山田穂」の商品名で販売を開始している。

北本 暢男（西脇普及センター）

幻の酒米「但馬強力」

「但馬強力」は、大正から昭和にかけて、鳥取県で栽培されていた「強力」を県立農業試験場但馬分場（現県立北部農業技術センター）で純系淘汰を行い育成した品種である。1928年に県奨励品種となったが、1935年頃に「山田錦」、「兵庫雄町」が現れ、奨励品種から消え去った。

玄米の形質から、「但馬強力」が丹波の土と水に合うと確信された。1998年に、市島町、丹波ひかみ農協、柏原普及センターの協力のもとに、ブランド酒造りと大規模稲作農家の作期分散のため、晩生の中でも早熟で、吟醸酒が醸し出せる酒米として、60数年ぶりに氷上郡市島町の地で復活した。竹田地区を中心に、2000年には約1.5haで栽培されている。減農薬無化学肥料で栽培した「但馬強力」を使って、市島町内の西山酒造が純米吟醸酒「丹鼓」と命名して販売している。

大原 博幸（柏原普及センター）